

令和 3 年 5 月 26 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02271

研究課題名（和文）陽明門下の講学活動と「会語」資料に関する総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study on Jiangxue Activities and 'Huiyu' Materials of Disciples of Wang Yangming

研究代表者

小路口 聡（Shojiguchi, SATOSHI）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：30216163

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,900,000円

研究成果の概要（和文）：(1) 王畿・鄒守益・聶豹の「会語」資料を精読し、その訳注を学術誌に発表した。(2)江西省（2017）、江蘇省（2018）、湖南省（2019）の陽明講学関係の史蹟調査を実施した。(3)2019年9月13日から15日まで、復旦大学哲学学院と共催で、陽明後学の先駆的研究者である荒木見悟（九州大学名誉教授）の人と学問を顕彰するシンポジウム「中国哲学的豊富性再現 荒木見悟と中日儒学国際検討会」を開催した。(4)陽明後学の「会語」資料に頻出する哲学用語・人名・地名を採集し、詳細な解説と豊富な用例をまとめた『陽明門下の「会語」記録を読むための用語集』を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで我々の研究グループは、陽明後学の良知心学とその講学活動の原理的・実践的な関係性を探ってきたが、王畿に始まり、鄒東廓・聶豹らの会語資料の精読と、分かり易い現代語訳の作成を通して、その緊密な関係性をより鮮明に描き出すことができた。彼らの講学活動は、陽明学が庶民階層へ浸透してゆく道を開いたことから、この講学活動の実態を解明することは、学術・思想を広く共有財産（コモンズ）として、社会が共有していく道を開く手段について考えていく上で、重要な鍵となるであろう。

研究成果の概要（英文）：(1) Perused 'huiyu' materials of Wang Ji, Zou Shouyi, and Nie Bao and published the annotated translation in an academic journal. (2) Surveyed historical sites related to Yangming jiangxue in Jiangxi (2017), Jiangsu (2018), and Hunan (2019) provinces. (3) From September 13 to 15, 2019, co-hosted with the School of Philosophy, Fudan University, the symposium "Reconstructing the Richness of Chinese Philosophy - Araki Kengo and the China-Japan Confucianism International Symposium" to honor the personality and study of Araki Kengo (Professor Emeritus, Kyushu University), a pioneering researcher in post-Yanming studies. (4) Collected philosophical terms, names of people, and places that frequently appear in the 'huiyu' materials of post-Yanming studies, and compiled detailed explanations and abundant examples into the "Glossary for Reading 'Huiyu' Records of Disciples of Yanming."

研究分野：中国哲学（宋明儒学思想）

キーワード：陽明学 良知心学 陽明後学 講学 会語 対話 哲学資源 コモンズ

1. 研究開始当初の背景

近世儒学、中でも陽明学を信奉する者たちにとって、志を同じくする学友が多数集まって、互いに自身の学びを研鑽し合う「講学」という学問形式は極めて重要な意味をもった。そして、この講学活動が空前の活況を呈したのは、王守仁が提唱した「良知」の学が社会に浸透していった明代末期であった（鶴成久章「中国近世の書院と宋明理学 講学という学問のかたち」、2014年）。

明末の講学活動の中心を担った陽明門下の講学活動については、すでに中純夫による先駆的で優れた研究業績がある。すなわち、「徐階研究」(『富山大学教養部紀要』24号、1991年)、「張居正と講学」(同25号、1992年)、「耿定向と張居正」(『東洋史研究』53巻1号、1994年)、「王畿の講学活動」(『富山大学人文学部紀要』26号、1997年)等である。また、ほぼ同時期に、福田殖「羅念庵の『冬遊記』について 王門における講学活動の一場面」(『陽明学』第16号、1994年)、佐野公治「羅近溪講学紀年考(一)」(『名古屋大学文学部研究論集』45、1999年)、「羅近溪講学紀年考(二)」(同46、2000年)、「明代嘉靖年間の講学活動 陽明学派の講学」(『陽明学』第16号、2004年)等が相次いで発表された。中国・台湾においても、2000年以降に優れた研究業績が多数発表されており、代表的なものとしては、呉震『明代知識界講学活動系年(1522-1602)』(学林出版社、2003年)同『陽明後学研究』(上海人民出版社、2003年)呂妙芬『陽明学士人社群 歴史、思想与实践』(中央研究院近代史研究所、2003年)陳時龍『明代中晚期講学運動(1522-1626)』(復旦大学、2005年)俞樟華『王学編年』(吉林大学出版社、2010年)等がある。

このような研究状況を背景に、申請者は、吉田公平・早坂俊廣・鶴成久章・伊香賀隆・播本崇史らの分担研究者とともに、2009年度に「王畿の良知心学と明末の講学活動に関する基礎的研究」というテーマで科研費を獲得し、2011年度までの三年間、陽明門下の中心人物であるとともに、その講学活動を考える際に最も重要な人物の一人である王畿の講学活動の記録『龍溪王先生会語』を主な分析対象として、王畿の良知心学と明末の講学活動に関する基礎的な知見を得た。その後、この共同研究で得られた成果をより深化させるべく、2013年度には、「王畿の良知心学と明末の講学活動に関する発展的研究」というテーマで新たな科研費を獲得し、会語資料の精読と現地調査とを併用しながら、王畿を中心とする陽明門下の講学活動の思想的意義を詳細に考究してきた。2015年8月には、この研究の総括の一環として、中国の研究協力者らと共に、国際シンポジウムを開催し、2018年2月に、その成果をまとめた論文集(『語り合う<良知>たち 王龍溪の講学活動』)を出版した。

これまで申請者が研究代表者として行ってきた陽明門下の講学活動に関する研究は、その対象を王畿とその周辺の人物に絞ったものであったが、これまでの研究で得られた成果をさらに発展させ、講学活動と良知心学との原理的な関係性を、さらに構造的に明らかにするためには、対象を王畿以外に拡大する必要がある。また、これまでの研究を通じて、良知心学研究における「会語」資料の独自の意義も見えてきた。しかし、『龍溪王先生会語』のように、「会語」が単行の書籍のかたちで残存している例は非常に少ない。そのため、本研究では、まずは陽明門下の学者の文集をはじめとする著作、及び地方志、書院志などから「会語」資料を収集・整理し研究基盤を築き上げる作業を行っていくことが必要であると考えた。その上で、引き続き、これまで研究実績によって確立してきた研究手法を用いて、陽明門下の講学活動の思想的意義について、独自の考察を行いその成果を国内外に公表したいと考えた。

2. 研究の目的

王畿の講学活動と「会語」との関係性を考究してきた研究の成果を踏まえ、対象を王畿以外に拡大することで、王陽明が確立し、門人たちが継承発展させていった良知心学と陽明門下の講学活動との原理的関連性に関する理解を深化させるのが目的である。また、この研究によって、陽明門下の講学活動の実態を解明するための基礎資料を、哲学資源として学界に広く公開するとともに、講学活動を通して見えてくる良知心学の哲学的意義についても様々な角度から検討していきたいと考える。さらに、「良知」を固有するという点において、平等な存在と見なされる、主体的自立的実践者同士の「対話」による自己省察と自己検証を重視する「講学」という哲学実践の分析を通して、中国哲学が世界哲学史の中でいかなる普遍的な意義を有するのかという点について考察し、その成果をシンポジウムのかたちで広く社会に公開するとともに、一般の読者でも通読に堪えうるようなかたちにして公刊することで、中国哲学を公共の共有財産(コモンズ)、すなわち、「哲学資源」にするための道を拓くことを目指している。

3. 研究の方法

上述の通り、『龍溪王先生会語』のように、陽明後学の「会語」が単行の書籍のかたちで残存している例は非常に少ない。そのため、本研究では、まずは陽明門下の学者の文集をはじめとする著作、及び地方志、書院志などから「会語」資料を収集・整理・校訂し、研究基盤を築き上げる作業から始めなければならない。その上で、過去の研究実績によって確立してきた研究手法を用いて、資料を徹底的に共同で精読し、訳注を作成するという地道な作業を通して、資料の上に散見する陽明門下の講学活動の実態、知識人のネットワークを顕在化させながら、その思想的意義について、共同で考察を加えていき、その成果を訳注として、また、論文として、国内外に公表していく。

その際、陽明後学の講学活動が行われた地域性にも注目し、中国の研究協力者、および、現地の研究機関に所属する研究者たちの協力も得ながら、現地調査も行っていく。収集した資料・データを整理し、公開する。

具体的な方法としては、毎年3回、研究会を開催し、各自が収集・整理した「会語」資料の内容を検討し、特に重要と判断される「会語」については、共同で精読し、その成果を訳注のかたちで公開することとする。また、現地調査で得られた情報・知見を整理し、諸資料を有機的に組み合わせたデジタルコンテンツの作成を目指す。研究計画の遂行に当たっては、海外研究協力者にも積極的な参加を要請し、多様な視点を確保できるようにする。さらには、陽明学の講学活動が有する世界哲学史的意義の考察を進め、一般にも開かれた研究会の開催を経ながら、中国の研究者たちも交えて国際シンポジウムを開催し、その成果を論文集にまとめて、広く社会に公開還元していく。(ただし、最終年度は、コロナ禍の影響で、シンポジウムが開催できず、当初の目的は達成できなかったことを、お断りした。)

4. 研究成果

われわれが、これまでの度重なる科研の申請において、「哲学資源」としての中国思想を標榜してきたが、「中国哲学を専門家の世界に閉じこめないで、公共の財産にするための道を拓く」という研究の主目的は一貫している。そして、2016年度に終了した科研「王畿の良知心学と明末の講学活動に関する発展的研究」に取り組んでいた際に、国内外の研究者と議論を積み重ねている中で強く意識するようになったこととして、陽明後学による講学活動を東アジア思想史の中に位置づけて考察することの重要性である。この4年間の共同研究を通して、「講学」というかたちの思想運動・実践活動が、東アジア思想史の中でどういう特質と意義を有したのかという問題について、我々の理解を学界に示すことを目指してきた。さらには、本来、哲学が具えていた「対話性」という視点から見て、陽明後学による講学活動が、世界哲学史において特筆すべき意義を有していることを明らかにすることにも繋げられることを予想していたが、その点についても、確かな感触を得ることができた。

明末の陽明後学の「会語」資料を発掘整理し、現代日本語に翻訳し、開かれた「哲学資源」として、分かりやすい形で世に問うことは、単に中国哲学の研究の発展に資するのみではなく、洋の東西を問わず、広く「哲学」に興味関心を持つ人々に対して、陽明学以外の、様々な哲学的議論との比較を可能にするような材料を広く学术界、さらには、一般市民に、知的共有財産(コモンズ)として提供することができると考え、そうした観点から、研究を進めてきた。なお、この点については、陽明学の庶民階層への浸透を、積極的に行ってきた陽明後学の講学講会活動から、われわれが学んだことでもある。

その具体的な研究成果としては、以下の通りである。

(1)本科研プロジェクトは、方法論としては、文献読解と現地調査を2本柱としているが、その1つである会語資料の読解については、当初の予定に基づいて、陽明後学の会語資料の発掘と分析を、各自の資料収集をもとに、年3回、メンバー全員が集まったの研究会(「会読」形式の読書会)において行った。その成果は、学術雑誌『白山中国学』(東洋大学白山中国学会の機関誌)に、6回に分けて掲載した。また、代表者も、単独で王畿の会語資料の訳注を2篇、大学紀要に掲載した。詳細は業績一覧を参照。当初は、陽明後学の10人の学者たちを行う予定であったが、資料の選定吟味に時間を要するなど、思いの外、進捗せず、結局、王畿・鄒守益・聶豹の3名の会語資料を精読するに止まった。それは、何よりも未発掘重要資料の多さに帰因するものであり、今後もかたちを変えて研究を継続していきたい。その一つのかたちとして、われわれは、新メンバー(分担研究者)を加えて、2021年度に新たに科研(基盤B)を獲得し、安徽省の新安地区にターゲットを絞った「新安理学」の脱構築 中国近世の程朱闕里における思想の変遷に関する通時的考察」(基盤B)という新プロジェクトを立ち上げることとした。

(2)現地調査については、2017年には江西省吉安地域の陽明後学講学遺跡調査を行い、2018年に

は江蘇省地域の陽明後学講学遺跡を、2019年には湖南省長沙・湘潭・衡陽地域の講学遺跡調査を行った。その報告書は、随時、上掲の『白山中国学』に掲載した。2020年は福建省を調査する予定であったが、コロナ禍のため、海外渡航ができず、中止を余儀なくされた。

(3)2018年には、東アジアにおける「講学」活動の思想史的意義を解明することを目的に、10月18日から21日までの4日間、中国から銭明先生（浙江省社会科学院）、呉震先生（復旦大学）、何俊先生（同上）、申緒璐先生（杭州師範大学）の研究協力者4名を招いて、佐賀藩の儒学者古賀穀堂らのゆかりの地や、弘道館（藩校）・多久聖廟など、儒学関係の史蹟調査を行い、日中における儒学者の「講学」活動の比較考察に関する研究交流を行った。

(4)2019年には、9月13日から15日まで、上海復旦大学において、同大学哲学学院の呉震教授との共催のかたちで、日本のみならず、中国においても評価の高い、陽明後学の先駆的研究者である荒木見悟先生（九州大学名誉教授）の人と学問を顕彰するシンポジウム「中国哲学的豊感性再現 荒木見悟と中日儒学国際検討会」を開催し、本科研の全メンバーも参加し、研究発表および研究交流を行った。シンポジウムには、中国・台湾・香港・韓国・日本から、総勢40数名の宋明儒学の研究者たちが一堂に会し、その内の29名が論文発表を行った。都合3日間にわたって、非常に活発な議論と親密な研究交流が行われた。その詳細については、播本崇史氏による会議参加報告書が『白山中国学』通巻26号に掲載されているので、参照されたい。また、今年中には、このシンポジウムでの発表をまとめた論文集が、中国の上海古籍出版社より刊行される予定である。

(5)周知の通り、最終年度である2020年度は、コロナ禍の影響下にあつて、従来の日中を結ぶ共同研究や国際シンポジウム開催のみならず、国内での研究会の開催もままならない状況であった。それでも、オンラインで、研究会（リモート会議）を2回開催し、そのうち1回は、中国の研究協力者とも繋いで、研究交流を行うことができた。われわれは、このコロナ禍で移動を制限された時間を利用して、各自、ほぼ十年の歳月を費やしてきた『龍溪王先生會語』全訳注の出版刊行に向けて、これまで蓄積してきた研究成果を見直し、編集整理し直すこととした。哲学資源として、誰にでもアクセスできるように、分かり易い現代語訳と、その思索の背景がたどれるような、詳細な注を付した訳注を作成し、解題と王畿年譜を付した。同時に、もっとも代表的な会語資料でもある『龍溪會語』を素材として、『陽明後学の会語記録を読むための用語集』（仮題）の作成を企図し、陽明後学の会語資料に頻出する哲学用語、人名、地名を収集し、五十音順に配列し、詳細な解説と豊富な用例をまとめ、それに関係地図集を加えた4部構成の「読む」事典を作成した。それぞれ項目については、『龍溪會語』の該当の条数を挙げているので、同書の索引としても活用できるものに仕立て上げた。いずれも、科研の出版助成に応募したが、残念ながら、不採択となったため、未刊である。学術的にも、社会的にも、十分な意義と価値を有するものであることを自負しているため、次回、かたちを変えて、再提出する予定である。

なお、この『龍溪王先生會語』全訳注については、すでに中国人研究者の目にも留まり、中国での翻訳出版の依頼が来ていることを、中国へのインパクトの一つとして記しておきたい。

(6)最後に、本研究の社会的意義について言えば、陽明後学の講学活動は、陽明学が庶民階層へ浸透してゆく道を開いたことから、この講学活動の実態を解明することは、学術・思想を広く共有財産（コモンズ）として、社会が共有していく道を開く手段について考えていく上で、重要な鍵となるものであることを示唆することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 吉田公平・小路口聡・早坂俊廣・鶴成久章・伊香賀隆・播本崇史	4. 巻 27
2. 論文標題 聶豹「会語」資料（復古書院記他）訳注 陽明門下の会語記録を読む 其の六	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 白山中国学	6. 最初と最後の頁 25～51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小路口 聡	4. 巻 74
2. 論文標題 呉震「現成良知」（上） 陽明学とその後学の思想的展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『東洋思想文化』東洋大学文学部紀要（東洋思想文化学科篇）	6. 最初と最後の頁 1～47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小路口聡	4. 巻 30
2. 論文標題 過ちに気づくということ 王畿の改過論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 陽明学	6. 最初と最後の頁 1 - 49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 早坂俊廣	4. 巻 8
2. 論文標題 論劉宗周思想的意与知 従与史孝復的争論来看	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 浙江社会科学	6. 最初と最後の頁 113-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田公平	4. 巻 26
2. 論文標題 日本の書院について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 白山中国学会	6. 最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田公平・小路口聡・早坂俊廣・鶴成久章・伊香賀隆・播本崇史	4. 巻 26
2. 論文標題 郷守益「会話」資料(惜陰・青原・龍華の会関連)訳注 陽明門下の会話記録を読む 其の四	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 白山中国学	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田公平・小路口聡・早坂俊廣・鶴成久章・伊香賀隆・播本崇史	4. 巻 26
2. 論文標題 郷守益「会話」資料(復古書院関連)訳注 陽明門下の会話記録を読む 其の五	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 白山中国学	6. 最初と最後の頁 23-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 播本崇史	4. 巻 26
2. 論文標題 湖南省長沙・湘潭・衡陽講学関係地史跡調査報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 白山中国学	6. 最初と最後の頁 59-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田公平・早坂俊廣・鶴成久章・伊香賀隆・播本崇史	4. 巻 通巻25号
2. 論文標題 郷守益「会語」資料（龍華會語・惜陰申約・惜陰説）訳注 陽明門下の会語記録を読む 其の三	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 白山中国学	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小路口 聡	4. 巻 72
2. 論文標題 王畿「余氏家會籍題辭」訳注 陽明門下の講会活動記録を読む（四）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『東洋思想文化』東洋大学文学部紀要（東洋思想文化学科篇）	6. 最初と最後の頁 29-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 早坂俊廣	4. 巻 46
2. 論文標題 劉宗周に於ける意と知 - 史孝復との論争から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋古典學研究	6. 最初と最後の頁 17-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴成 久章	4. 巻 46
2. 論文標題 万曆元年浙江郷試の策題について 王守仁の孔廟従祀と浙江王門	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋古典學研究	6. 最初と最後の頁 19-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田 公平	4. 巻 56
2. 論文標題 中国文化の贈り物 性善説	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋学研究	6. 最初と最後の頁 297-303
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊香賀隆・播本崇史	4. 巻 25号
2. 論文標題 江蘇省陽明後学講学遺跡調査報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 白山中国学	6. 最初と最後の頁 45-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田公平・小路口聡・早坂俊廣・鶴成久章・伊香賀隆・播本崇史	4. 巻 24号
2. 論文標題 鄒守益「会話」資料(青原の会) 訳注 陽明門下の会話記録を読む 其の二	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 白山中国学	6. 最初と最後の頁 1-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊香賀隆・播本崇史	4. 巻 24
2. 論文標題 江西省吉安陽明後学講学遺跡調査報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 白山中国学	6. 最初と最後の頁 43-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小路口 聡	4. 巻 71
2. 論文標題 王畿「書續溪頴濱書院同心會籍」訳注 陽明門下の講会活動記録を読む(三)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『東洋思想文化』東洋大学文学部紀要(東洋思想文化学科篇)	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計12件(うち招待講演 5件/うち国際学会 8件)

1. 発表者名 吉田公平
2. 発表標題 荒木見悟先生的哲学研究特色 以島田虔次先生之思想史研究為対比
3. 学会等名 中国哲学的豐富性再現 荒木見悟与中日儒学国際検討会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小路口聡
2. 発表標題 “心創造理” 論荒木見悟先生“心即理”的解解釈
3. 学会等名 中国哲学的豐富性再現 荒木見悟与中日儒学国際検討会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 早坂俊廣
2. 発表標題 關於荒木見悟“南宋功利学”研究
3. 学会等名 中国哲学的豐富性再現 荒木見悟与中日儒学国際検討会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鶴成久章
2. 発表標題 荒木見悟博士の福岡学藝大学在職時代の研究
3. 学会等名 中国哲学的豐富性再現 荒木見悟と中日儒学国際検討会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊香賀隆
2. 発表標題 荒木見悟の轟双江研究
3. 学会等名 中国哲学的豐富性再現 荒木見悟と中日儒学国際検討会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 播本崇史
2. 発表標題 荒木見悟先生の排耶論と万物一体論
3. 学会等名 中国哲学的豐富性再現 荒木見悟と中日儒学国際検討会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小路口 聡
2. 発表標題 王畿哲学の可能性 研究と学の間で
3. 学会等名 二松學舎大学東アジア学術総合研究所陽明学研究センター主催公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉田 公平
2. 発表標題 中国文化の贈り物 性善説 (中国文化的贈予 性善説)
3. 学会等名 南京大学中国哲学講演会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 早坂俊廣
2. 発表標題 論劉宗周の“意”与“知”
3. 学会等名 宋明理学国際論壇 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鶴成 久章
2. 発表標題 万曆元年浙江郷試の策題 論王守仁の孔廟從祀与浙江王門
3. 学会等名 宋明理学国際論壇 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鶴成 久章
2. 発表標題 万曆四十四年の科場案に見る士人社会の腐敗
3. 学会等名 白山中国学会第16回研究発表大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小路口聡・播本崇史
2. 発表標題 語り合う 良知 たち 王畿の良知心学と講学活動
3. 学会等名 白山中国学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 早坂俊廣共著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 341
3. 書名 中国思想基本用語集	

1. 著者名 鶴成久章共著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 341
3. 書名 中国思想基本用語集	

1. 著者名 小路口聡・吉田公平・早坂俊廣・鶴成久章・内田健太・伊香賀隆・播本崇史・呉震・銭明・申緒口（王＋路） 他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 研文出版	5. 総ページ数 全421頁＋索引20頁
3. 書名 語り合う 良知 たち 王龍溪の良知心学と講学活動	

〔産業財産権〕

〔その他〕

『龍溪会語』を読む 王畿の良知心学と明代中晩期の講学活動
<https://sites.google.com/site/longxiwangxianshenghuiyu/biao-zhi>
 早坂俊廣 教員 BLOG [中国関係]
http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/hayasaka_1/cat12512/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉田 公平 (Yoshida Kouhei) (70036979)	東洋大学・東洋学研究所・客員研究員 (32663)	
研究分担者	早坂 俊廣 (Hayasaka Toshihiro) (10259963)	信州大学・学術研究院人文科学系・教授 (13601)	
研究分担者	鶴成 久章 (Turunari Hisaaki) (20294845)	福岡教育大学・教育学部・教授 (17101)	
研究分担者	伊香賀 隆 (Ikouga Takashi) (20722995)	佐賀大学・地域学歴史文化研究センター・研究員 (17201)	
研究分担者	播本 崇史 (Harimoto Takafumi) (40813572)	東洋大学・東洋学研究所・客員研究員 (32663)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	銭 明 (Qian Ming)		
研究協力者	呉 震 (Wu Zhen)		
研究協力者	申 緒 [王+路] (Shen Xulu)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 中国哲学的豊富性再現 荒木見悟与中日儒学国際検討会	開催年 2019年～2019年
-------------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	復旦大学哲学学院	復旦大学上海儒学院	上海市儒学研究会	他2機関